ファンシー地蔵の謎

木原　由菜
（手塚　恵子ゼミ）

はじめに
第１章　信仰対象としての地蔵
　Ⅰ. 従来の地蔵と最近の地蔵
第２章　ものとしての地蔵
　Ⅰ. 京都市左京区で見る様々な地蔵の形態
　Ⅰ－１　道端の地蔵①～㉚
　Ⅰ－２　町内会管理と思われる地蔵❶～❾
　Ⅰ－３　ファンシー地蔵1～4
　Ⅰ－４　表に纏めてみて分かったこと
　Ⅰ－５　聞き書き
　Ⅰ－６　考察
第３章　ファンシー地蔵とは何か
　Ⅰ. 水子供養とファンシー地蔵の関係性
　Ⅰ－１　長福寺
　Ⅰ－２　尊陽院
　Ⅰ－３　宝善院
　Ⅰ－４　極楽寺
　Ⅰ－５　調査を踏まえての考察
　Ⅱ. ファンシー地蔵とは何か
おわりに
引用及び参考文献

はじめに

京都に住んでいれば、普段歩いている道などで、何気なく見かけるのが地蔵のイメージである。その地蔵は総合佛教大辞典の地蔵菩薩の項目で「密教における胎蔵曼荼羅地蔵院の主尊としての像容は菩薩形で、左手に如意宝幢、右手に宝珠を持つが、のちには左に宝珠、右に錫杖を持つ比丘形に一定した。日本では８世紀頃すでに信仰され、平安末期にはさかんになったことが今昔物語集で窺え、多くの造像がなされた。」「江戸時代には平安末期の偽経延命地蔵菩薩経と賽の河原の信仰とによって、子供と縁の深い子安地蔵・子育地蔵などがある。」（『総合佛教大辞典』2022）と説明されている。

上記の通り、道端に置いてあるたくさんの地蔵は、日本が古くから信仰してきたものである。近代化が進み、昔からあるものも現代人の目に留まるような姿かたちに変わってきているなかで、日本で昔から信仰されてきた地蔵の現状と、地蔵に対する人々の認識の移り変わりを、本論では見ていくことにする。

第１章　信仰対象としての地蔵

Ⅰ. 従来の地蔵と最近の地蔵

日本の至る所の街中には、しばしば住民の信仰対象として地蔵が置かれている。８世紀頃から既に民間で信仰され、平安末期にはさかんになったとされる地蔵信仰で見られる地蔵の姿は、左手に宝珠、右手に錫杖を持ったものや、両手を合わせているものなど仕草は様々ある。その地蔵の表情は目を細めて薄く笑っている菩薩顔のものがほとんどである。

ファンシー地蔵の例　木原撮影

顔の凹凸が少なく、全体的にのっぺりとした印象の地蔵を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

しかし、最近至る所に今までの地蔵とは系統の異なる地蔵が出現している。それは従来の地蔵と比べて彫りが深く立体的で、目鼻立ちが分かりやすい。更に、表情も菩薩顔だけでなく、口を開けていたり、口角が上がっていたりするものがあり、かなり表情豊かなものになっている。

従来の地蔵の例　木原撮影

これらはみな背丈が小さいものが多く、現代に生きる私たちから見て可愛らしい風貌のものである。

また、従来の地蔵はそのほとんどが一体だけで独立しているが、最近出てきた可愛い地蔵は5体ほどの集合体であったり、2体で一つの地蔵であったりする。つまりくっついているのである。

このことから、今までの地蔵の在り方と、これから求められてくるであろう地蔵の在り方に何かしらの変化が生まれていることが分かる。では、その変化とはいったい何なのか。

第２章　ものとしての地蔵

Ⅰ. 京都市左京区で見る様々な地蔵の形態

筆者は、従来の地蔵との区別をつけるために、上記の「彫りが深く立体的で目鼻立ちが分かりやすく」、「表情が豊かで比較的背丈の小さい」可愛らしい地蔵を「ファンシー地蔵」と定義づけ、それらがいる場所はどこなのか、また従来の地蔵との明確な祀られ方の違いはあるのか等の調査を行った。

調査を行うにあたって、京都府内でファンシー地蔵がいるところを調べると、詩仙堂丈山寺にファンシー地蔵がいることが分かったため、まずは調査対象地区を京都府京都市左京区の一乗寺・修学院地区に限定し、更にそこから京都市立修学院小学校区内に絞った。一乗寺・修学院地区は、付近に叡山電車叡山本線が通っており、特に一乗寺はラーメン店が多く、一乗寺ラーメン街道として観光地にもなっている場所である。

その地区にある地蔵を「道端の地蔵･ファンシー地蔵・町内会管理と思われる地蔵」の３タイプに分類し、それぞれ場所・特徴・形態・管理者・日常の祀られ方・特別に祀る日の有無を表に纏めることにした。また、それぞれの分布図も制作し、地蔵の場所の散らばりを見ることにした。（表１左京区調査における地蔵リスト参照）

表に纏めた結果、道端の地蔵は30体、町内会管理と思しき地蔵は９体、ファンシー地蔵は４体確認できた。

Ⅰ－１　道端の地蔵①～㉚

道端の地蔵番号④～⑧、⑲については敷地内だが、町内会管理ではないため、道端の地蔵の枠に分類している。

①はマンションの敷地内に続く細い道にある。立体的ではない従来の地蔵で、顔がなかった。小さい屋根の下に二人の地蔵がおり、顔がないように見受けられる。屋根は壊れかけで蜘蛛の巣が張っている。管理者は不明だが、花瓶の中に枯れた草があったり、線香を立てるための香立（以下、香立とする）があるため、少し前までは誰かがお供えに来ていたようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

②は住宅の脇に隠れるように置いてある。地蔵というよりほぼ石のようにみえ、目鼻立ちは確認できなかった。しっかりした屋根と台座があり、地面に近い位置にある。管理者は不明だが、台座の両脇の花瓶に枯れ気味の花と、湯呑が一つ真ん中に置かれているので、定期的に誰かがお供えしに来ているようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

③は道端にある。立体的ではないので従来の地蔵であることは分かるが、顔の部分が判別できないためほとんど石に見える。しっかりした台座と屋根があり、白い前掛けをしている。管理者は不明だが、二つの花瓶に花が添えられていたので参

拝者は存在するようである。西日が強く当たるところに設置されているためか、花がしおれ気味だった。特別に祀られる日は無いと思われる。

④は赤山禅院の敷地内にある。輪郭は認識できるが、顔のつくりは苔に覆われているため判別が不可能であった。立体的ではない従来の地蔵である。地べたに直置きされており、松の柄の前掛けをしている。管理者は赤山禅院で、地蔵の前に小さい籠が一つ置かれ、その中にお賽銭が入っている。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑤は赤山禅院の敷地内にある。立体的ではなく、顔がかろうじて認識できる。地べたに直置きされていて、般若心経が細かく書かれた前掛けをしている。管理者は赤山禅院で、小さい籠が一つ地蔵の前に置かれている。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑥は赤山禅院の敷地内にある。それぞれ違う柄の前掛けをした二つの地蔵が地べたの近い位置に置かれていて、一つは顔部分が認識できるが、もう一つは顔がない。二つとも従来の地蔵である。小さな籠と蠟燭立てが置かれていたが、なにも供えられてはいなかった。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑦は赤山禅院の敷地内にある。柄の入った赤い前掛けのものと、無地の赤い前掛けをしたものがかためておいてある。片方は顔部分が認識できるが、もう片方は顔がない。管理者は赤山禅院のようだが、他のものと違いお供えスペースがなく、ただそこにあるだけだという印象を受けた。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑧は赤山禅院敷地内にある。3体が近くに置かれていて、かなり立体的であるが、ファンシー地蔵ではない。屋根はないが、3体各々に台座があり、他の院内の地蔵と比べて綺麗である。3体とも同じ柄の前掛けをしている。管理者は赤山禅院で、花瓶、湯呑、香立があるが、どれにも新しいものは供えられていなかった。香立には燃え尽きた後の線香が残っているように見受けられた。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑨は住宅街の端にある。立体的ではなく、顔が判別できなかった。6体がまとめておかれており、白い前掛けをしている。屋根はあるがしっかりとしたものではなく簡素であり、台座はなかった。管理者は不明だが、両脇に花が供えられていて、人数分の湯呑と香立があるため、お供えをしに来る人は存在するようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑩は道端にある。立体的ではなく、顔が判別できなかった。4体ほどまとめておかれていて、白い前掛けをしている。地べたに直置きされており、屋根はなかった。管理者は不明だが、4体それぞれの前に花瓶と湯呑があり、水とお花が供えられていたため、最近誰かがお供えに来たようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑪は住宅と畑の間にある。4体まとめて置かれていて、それぞれ立体的ではない。一つは首と胴体が分離している。地べたに直置きされていて、白い前掛けをしている。管理者は不明だが、二つの筒に葉っぱと、それぞれの地蔵の前に紙コップが置かれ、その中に水が供えられているので、お供えに来る人は存在するようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑫は車道脇にある。隣に赤山禅院の方向を指し示す石碑があり、道標となっている。輪郭はくっきりしているが、顔がほとんどなく、立体的ではない。地蔵用のスペースがあり、そこに直置きされている。屋根はなく野ざらしで、白い前掛けをしている。管理者は不明だが、両脇の花瓶に花が供えられており、湯呑が三つ置かれている。線香も二つほどあげられていて、ここ最近誰かがお供えをした形跡がある。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑬は公園のそばにある。顔は化粧で描かれたもので、元の顔は判別できないが、立体的ではない。しっかりとした台座と屋根があり、紫の暖簾が吊るされている。地蔵は赤い前掛けをしている。管理者は不明だが、両脇に花が供えられており、真ん中に湯呑とお菓子が置かれているので、お供えをする人は存在するようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑭は公園の中にある。輪郭が認識できる程度で、立体的ではない。しっかりした卍が彫られた台座と屋根があり、小さい白い前掛けをしている。管理者は不明だが、中の花瓶に花が供えられていて、水の入った湯呑の横に缶ジュースが置かれていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑮はマンションの駐車場にある。顔のつくりは立体的ではなく、軽く化粧がされていた。レンガの台座に大きめの屋根が付けられ、赤い暖簾が吊るされている。管理者は恐らくマンションの方で、両脇にかなり大きめのピンク色の菊のようなものが供えられていて、水入りの湯呑も置かれていた。火のついた線香が4本ほどあり、つい先ほどお供えした人がいたようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑯は道路沿いにある。顔のパーツはすり減っているため認識できないが、立体的でないことが分かる。他より屋根のつくりが細かく立派なもので、台座には卍が彫られている。管理者は不明で、花瓶と香立にそれぞれお供えがされていた。湯呑も置いてあり、参拝者が存在することがはっきりとわかる。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑰は住宅前にある。輪郭ははっきりしているが、顔のつくりが立体的ではない。地蔵自体にも台座がついている。左右に広い卍のついた台座と屋根に囲われており、紫色の暖簾が吊るされている。管理者は不明で、香立と燭台、湯呑があり、両脇の花瓶のうち片方に花が供えられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑱は住宅街道路沿いにある。福耳が確認でき、輪郭ははっきりしているが、顔のつくりは立体的ではない。地蔵そのものに台座がついている。外の台は少し高めになっていて、屋根には卍が書かれた白い暖簾が吊るされている。白い前掛けを付けている。管理者は不明で、両脇の花柄の花瓶に花が供えられている。香立とおりんが置かれていたが、おりんを鳴らすための棒は見当たらなかった。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑲は曼殊院天満宮の敷地内にある。3体まとまって置かれているが、すべて顔のパーツはすり減っていて判別できなかった。立体的ではない。3体のうち一つは首がなく、もう一つは首と体が分離している。あとの一つは欠損がなかった。木陰に置かれていて、水を供えるための窪みがついた台の上に乗っている。管理者は曼殊院天満宮で、水とお賽銭が供えられていたが、お賽銭は周囲に散らばってしまっていたため、手入れはあまりされていなさそうであった。特別に祀られる日は無いと思われる。

⑳は住宅の敷地内にある。顔が大きめの地蔵で、化粧をされているので元の顔のつくりは不明だが、立体的ではない。しっかりした屋根と台で囲われていて、赤い前掛けで首から下は隠されている。管理者はその住宅の方で、お茶と線香、ペットボトルに花が供えられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉑は住宅敷地内にある。他の地蔵と比べて顔のつくりが非常に分かりやすい。半分立体的ではあるがファンシー地蔵ではない。他の石像と一緒に庭のようなところに置かれている。管理者は住宅の方だが特に祀られてはおらず、お供え物もなかった。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉒は畑と畑の間にある。14体が横にずらっと並べられているのだが、どれも顔を判別することができない。立体的ではない。台座や屋根などは無く、土に突き刺してある状態で、全部が赤色の前掛けをしている。管理者は不明だが、それぞれの前に湯呑が置いてあり、4本の竹筒には花が供えられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉓は山の方に向かう道の途中にある。輪郭も顔も認識できなかったが、おそらく顔のつくりは立体的ではなかったであろうと思われる。屋根はしっかりしているが、台座がないので低い位置にある。管理者は不明だが、両脇の花瓶に花と、地蔵の前に置かれたお盆に湯呑と団栗が供えられている。お賽銭を入れるためのカップもあり、この地蔵にお供えに来る人は存在するようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉔は住宅街の細い裏道にある。4体まとまって置かれている。4体とも輪郭も顔も認識できないため、顔のつくりは立体的ではないであろうと思われる。フクロウ柄の前掛けをしている。屋根はなく野ざらしだが、お供えスペースがあり、そこにある二つの花瓶には葉っぱが供えられている。管理者は不明だが、真ん中に人数分の水入り湯呑があったので、最近誰かがお参りをしに来た形跡がある。燭台はあったが、蝋燭はついていなかった。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉕は道路脇のスペースにある。全体がカラフルに化粧されており、元の顔は判別できないが、顔のつくりは立体的ではないと思われる。4体がまとまって置かれており、それぞれが白い前掛けを

している。屋根はないが台座がしっかりしていて、うっすらと卍が認識できる。小さめの掃除用具が置いてあるため、管理をしている人はいるのだろうが、落ち葉がそこそこ散らばっていた。管理者は不明である。両脇の花瓶に花と、4体分の茶碗に水が供えられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉖は曼殊院から下って下の通りに出るところにある。輪郭がかろうじて認識できるが、顔のパーツはすり減っていて判別できない。つくりは立体的ではないと思われる。白い前掛けをしており、卍のついたしっかりした台座に置かれている。管理者は不明だが、台座に水を供えるための窪みがあり、小さなお花も供えられていたので、お供えをしに来る人は存在するようである。特別に祀られる日は無いように思われる。

㉗は住宅の壁の中にある。住宅の壁を掘ってスペースが作られており、そこに置かれている。元の顔はほとんどわからず、ほとんどが書き足されていて立体的ではない。白い前掛けを付けている。管理者は住宅の方で、両脇の花瓶に花が供えられている。湯呑と香立、お賽銭を置く場所が用意されている。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉘は詩仙堂に行くまでの坂道の角にある。10体ほどまとまって置かれていて、顔部分まで前掛けがかけられているが、顔部分が存在しないものもある。立体的ではない。大きめの植物が屋根の代わりをしており、コンクリートブロックが供え物を乗せる台座の代わりになっている。管理者は不明だが、湯呑と香立、石でできた花瓶があり、周りにゴミなども落ちていないため、定期的に掃除されているようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉙は住宅の敷地内にある。顔は藩閥出来ず、全体的にすり減っているように見えた。敷地内の一角にお参りスペースがあり、台座はしっかりしているが屋根はなかった。管理者は住宅の方で、両脇の花瓶に葉っぱが供えられている。湯呑と小さな燭台もある。特別に祀られる日は無いと思われる。

㉚はテクネジャパンという建物の入り口付近にある。他の石から地蔵の部分だけを切り出したような見た目をしている。顔のパーツは判別できるが、首から下は一体化している。花壇の中にあるスペースに2体固定されている。管理者はテクネジャパンで、特にお供え物はないが、周りが綺麗なので手入れはされていると思われる。特別に祀られる日は無いと思われる。

Ⅰ－2　町内会管理と思われる地蔵❶～❾

❶は京都信用金庫修学院支店の駐車場にある。一乗寺地区内で一番大きな地蔵で、目鼻立ちは認識できるが、立体的ではない。駐車場の一角にお供えスペースがあり、道路に面しているのでかなり目立つ。大きめの前掛けをしている。管理者は京都信用金庫修学院支店で、地蔵の両脇に花が供えられている。水を入れる場所もあり、地蔵の周りと供えられている花が新しかったので、とても綺麗に手入れがされていることが伺える。特別に祀られる日は無いと思われる。

❷は一乗寺馬場町の中の二股の分かれ道にある。目鼻立ちは化粧で強調されており、元の顔立ちはあまり分からないが、つくりは立体的ではない。台座がしっかりしており、奥まっている。掃除用具が中に立てかけられており、いつでも手入れができるようにされている。管理者は恐らく一乗寺馬場町の方々で、両脇に花が供えてある。湯呑やお賽銭も供えられていて、綺麗にされている。8月16日あたりに、精霊送りが行われていた時期があった（中村治 2009）ようだが、現在もあるかどうかは不明。

❸は一乗寺（ひいらぎ）公園前にある。化粧がされていて、元の顔はわからないが立体的ではない。屋根と台座があり、地蔵は金箔が貼られた赤い前掛けをしている。管理者は不明だが、延命地蔵尊として日常的に祀られているようである。小さい花が両脇に供えられており、真ん中に賽銭箱が置いてある。特別に祀られる日は無いと思われる。

❹は住宅敷地内にある。輪郭、目、鼻が黒い線で強調されているが、平べったい。元の顔は認識できなかった。敷地内にあるものだが、地蔵は外向きに設置されているので、住宅の方以外にもお参りに来る人がいる可能性が考えられる。台座はしっかりしており、屋根に卍が書かれた暖簾が吊るされている。管理者はその住宅の方で、両脇に花瓶があり、それぞれに花が供えられている。湯

呑が2つ、香立が一つ置かれていて、綺麗に手入れされているように見える。特別に祀られる日は無いと思われる。

❺は清賢院入り口にある。4体まとまって置かれていて、顔はほぼ認識できないが、輪郭はわかりやすくなっている。屋根がなく、野ざらしの状態だが、お供え物を置くスペースが広くとられている。管理者は恐らく清賢院で、両脇の花瓶にそれぞれ枯れ気味の花が供えられている。湯呑と香立もあり、落ち葉などもなく綺麗にされているように見える。特別に祀られる日は無いと思われる。

❻は住宅の前にある。輪郭はわかるが、顔のつくりは認識できず、立体的ではないと思われる。大きい屋根に囲われているが、台座はコンクリートブロックを組み合わせてできたものである。管理者は恐らく住宅の方で、2つの石の花瓶にそれぞれ花が供えられている。水の入った湯呑が3つと香立、お賽銭を入れるための瓶が置かれている。特別に祀られる日は無いと思われる。

❼は上一乗寺集会所の前にある。2つあり、片方は丁寧に化粧がされていて、元の顔はわからないが立体的ではない。もう片方も立体的ではないが、こちらは化粧をされていない。化粧をされているほうは、台座に町内安全と書かれている。もう片方は、中に10体まとまって置かれていて、十輪地蔵尊の文字が台座に彫られている。管理者は恐らく上一乗寺の町内会で、それぞれの前にお花が供えられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

❽は詩仙堂丈山寺に行くまでの坂道にある。10体ほどまとまって置かれており、輪郭は認識できるが顔のパーツはわからないもの、輪郭も分からないものがあった。かなり大きめのスペースが取られており、屋根からは赤い暖簾が吊るされている。管理者は下り松地蔵会で、両脇に葉っぱが供えてある。各地蔵の前に湯呑が置いてあり、そこに水が供えられている。小さなお賽銭箱が壁に取り付けられていた。特別に祀られる日は無いと思われる。

❾は狸谷山不動院に行くまでの道にある。子有地蔵尊という名前がついており、台座もしっかりしていて綺麗なつくりをしているが、ファンシー地蔵ではない。屋根と壁があって、傘や掃除用具などが立てかけられている。頻繁に手入れがされていそうに見えた。管理者は狸谷山不動院で、千羽鶴や、願い事が書かれた前掛けなど、他にもたくさんお供え物がある。お花も供えられており、身を清めるための柄杓もあった。特別に祀られる日は無いと思われる。

Ⅰ－3　ファンシー地蔵1～4

1は曼殊院天満宮にある。顔のつくりは立体的で、彫り物タイプである。表情ははっきりしている。明らかに石材では作られておらず、陶器製に見える。後からそこに置かれたようである。管理者は恐らく曼殊院天満宮で、地蔵が置かれている石の上にお賽銭が散らばっていたので、参拝者からは信仰の対象とみられているようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

2は圓光寺の敷地内の庭園にある。顔のつくりは立体的で彫り物タイプである。表情ははっきりしていて、従来の地蔵よりにっこりした顔をしていて、両手は頬にあてている。かなり小さく、庭に埋もれるように置かれている。苔が生えていたので、手入れはされていないように見える。管理者は圓光寺で、SNS向けで、庭のメインの地蔵になっているようである。特別に祀られる日は無いと思われる。

3は詩仙堂丈山寺の庭園にある。顔のつくりは立体的で彫り物タイプである。表情ははっきりしていて、従来の地蔵よりにっこりした顔をしている。3体くっついていて顔が大きいもの、2体がくっついていてほっそりしているものがあった。庭園内のいろんなところに置かれていて、屋根はない。客が出入りできるところに置かれているものの周りにはお賽銭が散らばっているので、信仰の対象にもされている様子である。管理者は詩仙堂である。特別に祀られる日は無いと思われる。

4は狸谷山不動院に行くまでの道にある。見た目は狸の石像で、立体的でつくりがはっきりしている。苔だらけで手入れはされていないが、参拝者の目に入るところに置かれている。❾と同じところにあるため、同じように信仰対象にされている可能性があると考える。特別に祀られる日は無いと思われる。

Ⅰ－4　表に纏めてみて分かったこと

道端にある地蔵や、町内会管理と思しき地蔵は、見た限りでは全て従来の地蔵であった。町内会管理と思しき地蔵は、地蔵会や町内会などの管理者がはっきりしている地蔵であった。道端にある地蔵は管理者が分からない地蔵ばかりであったが、ほとんどが前掛けをしていたり、お供え物があったりしたので、それぞれの地蔵にはお供えをしに来る人が存在していることが考えられる。また、地蔵に化粧が施されていたり、地蔵を自分の住宅の中に持っている人も見受けられ、一乗寺・修学院地区での地蔵信仰が盛んであることが伺える。

更に、町内会管理と思しき地蔵の中には、お盆の行事の時に祀られる地蔵もあるようである。筆者は調査対象地区のお盆の行事を実際には見に行けていないが、中村（中村 2018）によると、京都北郊の地蔵盆は、念仏講と呼ばれる人たちが中心となって行っている行事であり、大念仏数珠繰りや御詠歌詠唱などが行われているようである。

地蔵盆は大人が中心となっている行事だが、町内の子どもたちもお供え物を目当てに参加し、町内のいつもあるところから移動させてきた地蔵に飾りつけをしたり、屋台が出たりとお祭りのように賑やかな様子がうかがえる（中村 2018）。

そして、私が探しているファンシー地蔵は道路を歩いていても見当たらなかった。一方、詩仙堂丈山寺や圓光寺などの建物内に入ると、ファンシー地蔵を見かけることが多くなった。このことから導き出されるのは、ファンシー地蔵は道路などの外側にいるのではなく、お寺の中などの敷地内、つまり内側に存在するということである。

Ⅰ－5　聞き書き

詩仙堂丈山寺の副住職さんに境内のファンシー地蔵について聞き書きを行った。

詩仙堂にいるファンシー地蔵は、すべてとある人から 2017 年に奉納してもらったものである。奉納してもらったファンシー地蔵をどうするか住職と話し合った結果、拝観しに来てくれるお客さんに見てもらえるように、庭園内に配置しようということになったそうだ。庭に配置したファンシー地蔵を SNS に上げたところ、ファンシー地蔵を置いていなかった頃よりも、ファンシー地蔵を見たいというお客さんが増えて、結果的に集客率が上がったという。

Ⅰ－6　考察

詩仙堂にあるファンシー地蔵の話を聞いた結果、詩仙堂にあるファンシー地蔵の役割は、私たちの世代の人間などにも目に留まるよう工夫されたものであることが分かった。圓光寺にあるファンシー地蔵も、公式サイトに四季折々の風景の一つとして起用されているところを見ると、詩仙堂のファンシー地蔵と同じような役割を持っていることが考えられる。ここから導き出される結論は、ファンシー地蔵は SNS 向けに作られたものなのではないかということである。

しかし、ファンシー地蔵の役割は本当にそれだけなのだろうか。一乗寺・修学院地区にあるお寺の中のファンシー地蔵は、たまたまどれも SNS 向けのもの、つまり「客を呼ぶための地蔵」であったが、他のお寺にいるファンシー地蔵は、どのような役割を持っているのだろうか。

第３章　ファンシー地蔵とは何か

Ⅰ．水子供養とファンシー地蔵の関係性

ここで一度、本論で位置づけたファンシー地蔵の定義についておさらいしておきたい。ファンシー地蔵は、【「彫りが深く立体的で目鼻立ちが分かりやすく」、「表情が豊かで比較的背丈の小さい」可愛らしい地蔵】である。私は、この「小さくて可愛らしい」という部分に目をつけ、ファンシー地蔵は、子どもの姿を模しているのではないかと考えた。つまり、ファンシー地蔵は、SNS で見てもらうために可愛い姿をしているのではなく、「子どもの姿の地蔵」であるから可愛いのではないかということである。

では、「子どもの姿をした地蔵」というものに会えるのはどういうお寺であるのか。子どもに関する供養などをやっているところに行かないと会えないだろうと考えたため、私は京都周辺で水子供養をやっているお寺をインターネットで調べたうえでそこに行き、そこにファンシー地蔵はいるのか、またいるとするならばそのファンシー地蔵の役割は何なのかを調査していくことにした。

Ⅰ－1　長福寺

大阪府枚方市町楠葉 2-4-14 にある、総本山が知恩院の浄土宗のお寺で、水子供養のお寺として近隣で知られている。

元禄の赤穂浪士討ち入りの頃の過去帳が残っているが、それ以前の資料が大規模火災の時に焼失して存在しないと伝えられている。祀られている御本尊様はお釈迦さまである。

住宅街の中にあるお寺で、檀家以外の葬式や法事、月参りも受け付けている。

先代の住職は 48 代目で、今の住職は 49 代目である。

長福寺で行っている水子供養には 4 種類あり、本尊前で個別に供養のお参りをする普通供養、水子地蔵に亡き子の魂を託して供養する地蔵供養、亡き子に戒名を付け無縁仏にならないようにお寺で各回忌法要と以降の供養をする永代供養、お寺にこれない人のために、住職が代わりに供養のお参りを代行する自宅供養である。その中の地蔵供養で、かわいいお地蔵さまが扱われている。一人の水子に対して一つのお地蔵さま（手のひらに収まるサイズのファンシー地蔵）を選んで、それに魂込めをする。

境内の様子は次のようであった。

住職の苗字が先代と今代で違うため、この寺の住職は世襲ではなさそうである。

供養塔の周りには、魂込めがされた色とりどり、形も様々なかわいらしいお地蔵さまが並べられている。そのままのお地蔵さまも何体かいるが、中には帽子をかぶっていたり、前掛けをしていたり、特殊なお洋服を着ていたりするお地蔵様がいる。これらは、供養をしに来た人たちがお供え物の一種としてお地蔵さまに着せて帰られたものである。

長福寺の水子供養は全てが個別での供養になっているため、地蔵供養を選んだ人の数だけ、我が子に見立てたかわいいお地蔵さまが存在すると考えられる。

お寺周辺の住宅の壁に、長福寺の水子供養の看板があるので、周辺では名前の知れたお寺であることがうかがえる。

ファンシー地蔵は 1 種類でなく、表情が違うもの、ポーズが違うもの、表情・ポーズが一緒でも石材が違うもの、ザラザラのもの、ツルツルのものなど、かなり種類がある。表情の違いはよく見ると少し違うのか？となる程度のものであるが、ポーズの方は考え込んでいたり、両手をあげていたり、ハートを両手で抱えていたり、袋のようなものを枕にして寝ているものなど、結構な種類がある。比較的顔かたちがどれもはっきりしているが、石材によっては線が見えにくく、近寄らないとどの格好をしているのかわかりづらいものがある。

長福寺の寺務員さんに水子供養についての聞き書きを行った。

水子供養自体は、住民の方々のご要望があって先代の住職がやり始めたことであるが、具体的な時期などはわからない。水子供養の供養塔（地蔵塔？）は先代が建てたものであり、その供養塔は地蔵尊として作られたものではないので簡素ではあるが、文字が刻まれている。

水子供養のための地蔵を、まとめて一つの大きなお地蔵さまにすると、大層になってしまう。大層な祀り方を好まない人のために、出来るだけ大きくならないように一つ一つお地蔵さまを選んで供養する形をとっている。

供養するための小さいお地蔵さまが、従来の顔のお地蔵さまではなく、顔がはっきりしたファンシー地蔵である理由は、小さく、かつかわいいお地蔵さまにすることで、一人一人が水子供養のお参りや供養そのものに来やすいようにするためだという。

水子供養をされた方々は、供養が終わった後もたびたび来られて、お菓子やお花などをお供えされる。

住職は毎日のように供養をされているため、定期的な地蔵へのお参りなどはこの寺では行っていないとのこと。供えられているファンシー地蔵はすべて石材屋に頼んで作ってもらっている。特にファンシー地蔵についての特別な呼び方などは無い。

Ⅰ－2　尊陽院

京都府京都市上京区本法寺前町 650-3 にある、日蓮宗本山の一つである本法寺の塔頭寺院で、『尼さんのおこなう「あたたかな水子供養」』として有名である。入り口は本法寺内にある。本法寺は室町時代の 1436 年（永享 8 年）に久遠成院　日

親上人により開創され、その後に京都の様々な地を経て、1587年（天正15年）豊臣秀吉の都市整備により現在地に建立されたもの。また、尊陽院は1575年（天正3年）に日恵上人が創立したものである。御本尊は鬼子母神である。

尊陽院は、580年前から続くお寺で、昔から守られてきた苔に覆われた寺であったが、今の住職夫妻が平成19年に任されたときには、手の付けようがないと思われるほど古い寺であった。この時から、尼僧さん自身の経験から、人の痛みへの救いと祈りに心を向ける「水子供養」を主とするお寺となった。

尊陽院の水子供養には、まえかけ水子供養・わらべ地蔵の永代水子供養・わらべ地蔵の特別水子供養･納骨･納骨とわらべ永代供養の5種類がある。まえかけ供養の場合は、供養当日のみの読経だが、わらべ地蔵の場合は毎年命日に読経がされる。

境内の様子は次のようであった。

水子供養の地蔵である「まえかけ地蔵尊」は大きな屋根に囲われており、壁面にはたくさんのファンシー地蔵が置かれていた。一つ一つ少しずつ表情に違いがあり、地蔵の服部分に花柄が施されている。その花柄も一つ一つ違いがあって、たくさんの「世界に一つ」のファンシー地蔵たちであることがうかがえる。小さくてかわいいファンシー地蔵に囲まれることで、お参りに来た人たちに癒し効果を与えているのではないかと考える。

中心にあるまえかけ地蔵菩薩尊は、目をつぶって手を合わせている従来の地蔵で、表情も仏に見えるし、周りに従来のものとは違う装飾品があったりもしなかったため、ファンシー地蔵ではないと判断した。住職夫妻が尊陽院を任されたのが平成19年で、水子供養も始まりがその年のため、伝統的に受け継がれてきたものなどは無いと推測する。

尊陽院の尼僧さんに水子供養について聞き書きを行った。

水子供養を行うことで、水子の魂が迷子にならないように導くため、また痛みや悲しみを少しでも昇華へ導き、「いつでも会いに来てくださいね」という意味を込めて、それぞれに安寧のお顔の可愛らしいお地蔵さんを設置し、いつでも祈りに触れられる場所を作ったことから、全国より水子供養に訪れる人が増えたという。

尊陽院で水子供養をした方たちは、100パーセントの確率で「とても良かった」と言ってくださるらしく、供養が終わった後の、その後どうですかなどの「おはなし」を大切にしているため、水子供養をした方たちとの関係は、供養が終わっても続いていることがほとんどであるという。

本法寺のご本尊は鬼子母神だが、尊陽院の入り口にある水子供養の地蔵である「まえかけ地蔵菩薩尊」は、住職夫妻が尊陽院にきた平成19年からのものなので、鬼子母神は特に関係がないし、まえかけ地蔵菩薩尊自体にも特別に本尊があるわけではないという。陽が当たる場所にあるため、「陽だまりの水子供養」と呼ばれている。

尊陽院のファンシー地蔵は、「わらべ地蔵」と呼ばれている。石材ではなく信楽焼で作られていて、信楽焼の女性グループのうちの一人に、恰好や仕草、表情など多数の細かいリクエストをして、手作りで作成していただいているという。お父さんお母さんの想いで選んでいただけるように、あえて可愛らしく作っていただいているという。「まえかけ地蔵菩薩尊」は、水子供養のために置かれている地蔵なので、縁日などは特になく、また鬼子母神も直接関係がないため、鬼子母神の縁日にお参りをするということもないという。お寺としては、毎年施餓鬼大法要にて水塔婆供養をおこなうが、供養をしに来た方や、お参りをしに来た方などについては、地蔵盆の時期などに関わらず、いつでもお参りができるようにしているとのことであった。

Ⅰ－3　宝善院

京都府宇治市五ヶ庄三番割34-3にある、黄檗宗大本山萬福寺の塔頭寺院の一つである。

江戸時代初期の1690年（元禄三年）に独振性英禅師によって創建された。元々は現在の黄檗プールの場所にあり、1875年（明治8年）に陸軍省の火薬貯蔵庫建設用地として政府に収接され、現在の地に移転している。

御本尊は釈迦牟尼仏、脇侍に独振性英禅師と蒲庵浄英禅師を祀っている。独振性英禅師は宝善院を創建した人物で、長崎の眼鏡橋等のアーチ式の橋の設計にも尽力している。蒲庵浄英禅師は御本

山萬福寺二十三代住持であり、伊藤若冲と親交が深い人物で、若冲筆の禅師の肖像画も残っている。

境内には、永代供養の「みちびき地蔵尊」、水子供養の「数珠かけ地蔵尊」干支を守護する守本尊八仏が安置されており、参られた方の安寧を護持頂けると伝わっている。

守本尊八仏については、子年生まれは千手観音菩薩、丑・寅年生まれは虚空蔵菩薩、卯年生まれは文殊菩薩、辰・巳年生まれは普賢菩薩、午年生まれは勢至菩薩、未・申年生まれは大日如来、酉年生まれは不動明王、戌・亥年生まれは阿弥陀如来である。

宝善院の水子供養は宗教・宗派を問わずに行われている。数珠かけ地蔵供養と永代水子供養があり、どちらの供養をする際にもお参りするのが境内に祀られている「数珠かけ地蔵尊」である。数珠かけ地蔵尊の両脇には、地蔵菩薩になるための修行中である二人のわらべ地蔵が祀られている。左は錫杖を手に持ち、右は宝珠を頭に乗せている。

水子供養に関する行事については、お盆に先駆けて、立秋の18時半ごろから、数珠かけ地蔵点灯祭がはじまり、水子供養と数珠供養の合同法要が行われる。ここで一年に奉納された数珠の供養を行う。日が暮れた後には、献灯された願い事が込められたランタンの道が数珠かけ地蔵尊の前にできる。

境内の様子は次のようであった。

数珠かけ地蔵尊の首や左手には、大小さまざまな数珠がかけられていて、たくさんの供養を一身に受けとめられてきたであろうことが一目でわかるようなお姿だった。数珠の数だけでも、このお寺で水子供養をしていく方々がとてもたくさんいるのだということがうかがえる。地蔵尊の周りに葉っぱなどもなく、すっきりした綺麗なお供え場所となっていた。数珠かけ地蔵尊の両脇のわらべ地蔵は、二人とも表情や仕草がはっきりしていて、修行中ということもあってかなり険しめのお顔をされている。そばには音の鳴る石「サヌカイト」が置かれていて、参拝者の心が休まるような様々な工夫がされている。

また、境内には10体ほどの手のひらサイズの可愛らしい「お出迎え地蔵」がおられ、両手を合わせて微笑まれている。笠をかぶったもの・かぶっていないもの、二人くっついているもの・一人のものと、数は少ないけれど姿が様々なので、お参りに来る人達の気持ちが落ち着くようにということを大切にされているのだと考える。

それぞれの干支の守本尊の周りには、それぞれの干支の動物が置かれていて、境内全体を通して、可愛らしくて気持ちがほっこりする印象であった。

宝善院の住職さんとそのご家族に水子供養について聞き書きを行った。

宝善院が水子供養を始めたのは今から5年ほど前で、水子供養がしたいとの要望もあって今の住職の息子さんが始めたことだったという。過去を掘り下げると未来が明るくなるとの考えから、水子に対するお話や相談を聞くこともあり、供養が終わった後も自由にお参りしていただいているそうだ。わらべ地蔵のお顔について、お参りにきた方に険しい表情の訳を聞かれた際は、修行中だからであると答えるそうだ。地蔵菩薩は一番上の如来様から数えて9番目に位置しており、一人だけ髪がないのは修行の妨げになるからである。なので修行中のわらべも髪がないのだと教えていただいた。

数珠かけ地蔵尊は中国で作られたものだが、両脇のわらべ地蔵は四国の職人に作っていただいたものだという。

お盆前に行われる数珠かけ地蔵尊点灯祭では、今年は願いの込められたランタンの数が60前後あり、このランタンの数は年々増えてきているとのこと。点灯祭に来る方たちの年齢層は30代くらいまでだという。水子供養はあとから始めたことだが、今では数珠かけ地蔵尊が宝善院を経営的にも経済的にも支えているのだという。

院入り口と数珠かけ地蔵尊の周りにおられるお出迎え地蔵については、お参りに来た方たちがそれを見たときにほっとした気持ちになってもらうため、心休まるゆったり来ることのできるお寺であるということを伝えるために置いているという。

また、いつごろからあるかはわからないとのことだが、子宝に恵まれるとされている、お腹の部分が白い腹帯地蔵も境内におられる。この腹帯地蔵は、お参りすると本当に子宝に恵まれた人が多くいるので、宝善院としてもお参りしていってほしい地蔵の一つだという。

自分ができることをして相手に喜んでもらうこと、それをする相手が生きていても亡くなられていても、どんな形であれ供養になるということ、自分自身に対しての供養にもなることから、供養という名前がついていなくても、掃除や年間行事など様々な供養の形をとっているのだという。

Ｉ－４　極楽寺

奈良県生駒郡安堵町東安堵1453番地にある、聖徳太子ゆかりのお寺である。

宗派は真言宗で、約1400年前の用明2年（587年）に聖徳太子によって建立されたお寺の一つと言い伝えられている。

聖徳太子没後、常楽寺（現極楽寺）の勢いは次第に衰えを見せるが、寛弘3年（1006年）になると、恵心僧都という高僧が夢の中で常楽寺再興のお告げを受け、復興を遂げる。その後は勢いを増し、寺領700石とされ、境内に7つのお堂がある伽藍を整え、南に大門を建立、僧坊も70坊あったとされている。これは「阿弥陀様のお陰によるもの」と信じた恵心僧都はお寺の名前を「紫雲山　極楽寺」へと改めた。

戦国時代や明治の廃仏毀釈を乗り越え、1400年の歴史の中で生き続けるお寺として現在に至る。

極楽寺にはたくさんの仏様がいるが、祀られている御本尊は阿弥陀如来である。境内には国指定重要文化財の「阿弥陀如来坐像」が安置されている。

極楽寺では宗派を問わず水子供養・永代供養・ペット供養をやっており、古くから「子どものお寺」としても親しまれている。水子供養は個別供養、合同供養ともにやっており、お寺に来れない人のための供養なども行っている。（極楽寺ホームページ 2024）

境内の様子は次のようであった。

極楽寺のファンシー地蔵を見ていると、何も来ていないそのままの姿のものもいるが、ほとんどは服を着ていたり、人形に囲まれていたり、人形用のお家に入っていたりするものが多かった。大きさも表情の様々で、その一つ一つが汚れもなく埃もかぶっていないのを見ると、かなりの頻度で手入れがされていることがうかがえる。

棚に安置されているファンシー地蔵と、小川沿いに一つずつガラスケースで囲われているファンシー地蔵があるが、小川沿いのものはそれぞれに管理番号が振られており、供養に来た人たちの維持費をもとに、安置する場所が変わっていくのだと考えられる。ガラスケースに囲われているのは、本当に供養をした人本人のみその地蔵のお世話をすることができるようにするためであり、お供えされたお菓子や着せられた服などがなくならないようにするための工夫なのではないかと考える。

極楽地蔵も、作られてからそう時間は経っていないように見える。足元には小さな子どもの地蔵が二人いて、極楽地蔵の服にしがみついているように見える。

境内だけではなく、寺務所のカウンターにもファンシー地蔵がおり、どこにいてもファンシー地蔵が目に入るようになっているので、かなり癒し効果としての側面を強く出しているのであろうことがうかがえる。

極楽寺の住職さんが水子供養についてお話しされている動画を閲覧した。（極楽寺 YouTube 2024）

極楽寺の国指定重要文化財である「阿弥陀如来坐像」は平安時代中期に作成されたもので、廃仏毀釈や神仏分離があったにも関わらず、一度も修復履歴がないありがたい仏像であるという。

極楽寺は、子孫繁栄を願うため、梅の木がたくさん植えてあり、それに伴う樹木葬や、安産祈願なども行っているお寺である。そのため梅のお寺とも呼ばれている。

水子供養の大きな地蔵があり、それは「極楽地蔵」と呼ばれている。毎月15日の阿弥陀如来の縁日に、忙しくてなかなかお参りに来れない人のために水子・ペットのお塔婆供養を極楽寺本堂でするのだという。

極楽寺の水子供養は大昔から行われており、終わりに供養をするのではなく、供養をしたことで、これからが自分たちの父・母としての始まりであるということを大切にしたものである。ファンシー地蔵を用いた水子供養を始めたのは最近のことで、2008年にはまだお寺の境内にはいなかったのだという。

境内に沢山の可愛らしい地蔵がいるが、これらはお参りに来た人たちが、お洋服を着せてあげたり、季節の行事飾りをつけてあげたりなど、自分

でお世話をすることのできる地蔵としておかれている。自分だけのただ一つのお地蔵さまに、生まれてくるはずだった子どもはきっとこういうことがしたかっただろうという暖かい気持ちをそのままにお世話をしていただくということを大切にしているため、何百体と安置されているそうだ。またこの可愛らしいお地蔵さまは、新しい命を迎えるために安産祈願に来られた人たちのためにも、水子さんも一緒になって、授かった子どもに対しての祈願を行っているという。

極楽寺に来た人たちに楽しんでいただけるような様々な工夫の中に、地蔵も含まれている。極楽寺のファンシー地蔵に特に決まった呼び方はないが、「水子さん」「かわいいお地蔵さま」などと呼ばれている。

Ⅰ－5　調査を踏まえての考察

水子供養をやっている名の知れたお寺にそれぞれ行ってみた結果、数は様々だがすべてのお寺にファンシー地蔵がいた。どのお寺にも、1体だけでいるのではなく、少なくとも5体は必ずファンシー地蔵が発見できた。そのファンシー地蔵たちは、4つのうち3つのお寺では、水子の魂をその地蔵に込めて戒名をつけ、供養をした後もお寺で管理される、供養塔のような役割を担っていることが分かった。

また、ファンシー地蔵はお寺の中のお堂にいるのではなく、お寺の境内という開かれた場所にいる。つまり、お参りに来た人や供養をしに来た人など、何らかの目的があってそのお寺に来た人たちの目に入るような場所にファンシー地蔵がいると考えられる。実際に宝善院の住職さんは、『「お出迎え地蔵」が境内にいる理由は、このお寺にお参りに来た人たちが、この地蔵をみて心を安らかにしていただければよいと思ったから』だと話してくれた。ファンシー地蔵は、何か思いつめたようにお寺に来る人達の心を癒す役割を担ったり、お寺の雰囲気を和やかにするためのものとしても活用されているということになる。

更に、水子供養におけるファンシー地蔵は、安産祈願とも関係があることが分かった。この世に生まれ落ちることができなかった子どもを供養するのが水子供養だが、その水子供養で「終わり」にするのではなく、これから自分たちのところに来るかもしれない赤ちゃんのための「始まり」の祈願も一緒に行うことで、水子に対する気持ちも、次の赤ちゃんへの想いもお祈りすることができるのだと考える。極楽寺はまさにそうで、ファンシー地蔵を「自分でお世話のできる地蔵」だと捉えている。供養をした水子達に対して、生まれていたらこうしたかった、ああしたかったというかなえられなかった望みや物事をファンシー地蔵に託すのだ。そうして新たな命へ目を向けられるように、穏やかな顔で見守っていくという意味も込めてファンシー地蔵を置いているのではないか。

ファンシー地蔵が子どもの姿であるのはどの寺にも共通していたが、その在り方は一つではないようだ。例えば尊陽院のファンシー地蔵は全てが人の手によって作られていて、細かいリクエストがあるため、供養した水子が安らかであるようにという願いを込められての表情や仕草であろう。だが宝善院にいる「わらべ地蔵」は、ファンシーではあるが険しい顔をしていて、地蔵菩薩になる前の修行僧としての「わらべ地蔵」である。これも水子供養のための地蔵であることに変わりはないが、安らかな心の安寧を願う地蔵はこの寺では「お出迎え地蔵」である。同じ水子供養というものをやっていても、その寺それぞれの考え方によって、ファンシー地蔵に対する認識や、ファンシー地蔵に求めるものも変わってくるのだと考える。

この調査に対する結論は、水子供養をしている有名なお寺にはファンシー地蔵がおり、そのファンシー地蔵は、様々ある水子供養の方法のうちの一つとして活用されており、水子が安らかであるように、その地蔵に魂を込めるためのものである。更に、水子供養をした人たち以外にも、お寺にお参りしに来る人達の心や精神の安寧を願って作られ、次の段階へ一歩踏み出すための後押しをするために、人の目に入るような場所に安置されているものでもあるとする。

Ⅱ．ファンシー地蔵とは何か

水子供養をやっているお寺でのファンシー地蔵の役割は、水子の魂を込めるための器であり、供養及び参拝に来た人たちへの心の安寧を願うものであることが分かった。また、供養をしに来た人

たちがそのファンシー地蔵を何らかの形でお世話できるようになっていた。

水子供養をやっていないお寺でのファンシー地蔵の役割は、拝観に来る人達に見てもらうための置物としてのものと、公式サイトなどでのお寺の広報の役割があった。

この二つの共通点は、可愛いお地蔵さまがいることで、そこにお参りに来た人たちの心が安らぐようになっているということである。何故なら、可愛いお地蔵さまを目当てに見に来るということは、その要因となったものが「癒されたい」という感情からくるものであると考えるからである。

ここから導き出される結論は、ファンシー地蔵には、SNS向けに置かれたいわば「映え」要素のものと、水子供養というお寺の法事に用いられるものの2種類が存在するということと、ファンシー地蔵はそのどちらのものも、子どもの姿をしているということである。

更に、水子供養をやっているお寺にファンシー地蔵を探しに行ったことで、左京区調査での「道端にファンシー地蔵がいなかったのはなぜなのか」を考えることができるようになった。ファンシー地蔵は子どもを模した地蔵であり、お寺の中で、お世話をしてもらうなどのファンシー地蔵しか得られない役割を得る。一方、道端に地蔵がある場所は道路の突き当りであったり、家の前であったり、人目につかないような細い道など、事故が起こりやすいようなところや住宅の近くにあることが多い。交通安全や家内安全を願うのに、子どもの地蔵である必要はないのではないか。だから、道端にはファンシー地蔵がいなかったのではないかと考える。また、ファンシー地蔵の広まり方が一部水子供養という繊細なところを通っているため、敷地の外には置きづらくなっているということも考えられる。

おわりに

私は、地藏信仰は、たとえその地に地蔵盆などの地蔵に関する行事がなくとも、誰かが地蔵にお参りやお供えをしていれば成り立つものだと考えている。故にその信仰対象がファンシー地蔵であっても地蔵信仰は成り立ってしかるべきなのだが、昔からその地に住む人たちというのは、往々にして外から入ってくる新しいものを嫌う傾向にある。

こんなに可愛い顔をしていたり、彫りが深かったりするのは地蔵ではない、今までと同じ従来の顔の地蔵のほうが好ましいという意見も聞いたが、今まで水子供養をやっていなかったお寺が、近隣住民の「水子供養がしたい」という声を取り入れて、水子供養を行うようになり、更にそのお寺が供養のためのファンシー地蔵を作ってくれと職人に依頼するといった事例が増えているため、これから先も増えていくのは恐らくファンシー地蔵なのであろうと考える。今までにあった地蔵信仰とファンシー地蔵が重なり合うのは、まだもう少し先の話かもしれない。

【図一覧】

表1　左京区調査における地蔵リスト

□：ファンシー地蔵　●：町内会の地蔵　○：道端の地蔵

地蔵番号	1	2	3	4	❶	❷	●	❹	❺	❻	❼	❽	❾
場所	曼殊院天満宮	圓光寺敷地内の庭	詩仙堂敷地内の庭園	狸谷山不動院	京都信用金庫修学院支店の駐車場	一乗寺馬場町の中の二股の分かれ道	一乗寺（ひいらぎ）公園前	住宅敷地内	清賢院入り口前	住宅の前	上一乗寺集会所の前	詩仙堂に行くまでの坂道	狸谷山不動院に行くまでの道。4が同じ位置にある。
特徴	顔のつくりは立体的。彫り物タイプ。表情ははっきりしている。菩薩顔？	顔のつくりは立体的。彫り物タイプ。表情ははっきりしていて、従来の地蔵よりにっこりした顔。かなり小さい	顔のつくりは立体的。彫り物タイプ。表情ははっきりしていて、従来の地蔵よりにっこりした顔。3人連なったものと2人連なったものがある。	地蔵というより狸の石像。つくりは立体的でほっきりしている。	一乗寺地区内で一番大きな地蔵。目鼻立ちは認識できるが、立体的でない。	目鼻立ちは化粧で強調されていて、元の顔立ちはあまりわからないが、立体的ではない。	化粧がされていて元の顔はわからない。立体的ではない。	輪郭、目、鼻が黒い線で強調されているが平べったく、元の顔は認識できない。	顔はほぼ認識できない。輪郭は立体的でわかりやすくなっている。	輪郭はわかるが、顔のつくりは認識できない。立体的でない。	片方は丁寧に化粧がされていて元の顔のつくりはわからないが立体的でない。もう片方は化粧されておらず顔が認識できない。こちらも立体的でない。	輪郭は認識できるが、顔のパーツが認識できないもの、輪郭も認識できないものがある。どちらも立体的でない。	子有地蔵尊なので、台座もしっかりしているしかなり立体的なつくり。だがファンシーではない。
形態	後からポンとそこに置かれたよう。これだけは石ではなく陶器製に見える。	寺のお庭に野ざらしで置かれている。苔が生えていたので念入りなお手入れは行われていなさそう。	庭園内に野ざらし。苔などは生えていないが、庭に迎え入れた当初と色が変わってきているようなので手入れは念入りでなさそう。	狸谷山不動院に行くまでの道に野ざらし。苔だらけで手入れは されていない。	駐車場の一角にお供えスペースあり。野ざらし。	台座がしっかりしていて奥まっている。奥に掃除用具が立てかけられており、いつでも手入れができるようにされている。	屋根と台座がある。金箔が貼られた赤い前掛けをしている。	住宅敷地内の敷地内ではあるが、外からお参りできるように外向きに設置されている。台座はしっかりしており、卍が印刷された緞帳？が吊るされている。	屋根はなく野ざらし。お供え物を置くスペースが広くとられている。4体の集合。	大きいお家に囲われている。台座はコンクリートのブロックで作られている。	二つとも立派なお家の中にあり、化粧されているほうは台座に町内安全と書かれている。もう片方は10体ほどの集合で、十輪地蔵尊の文字が台座に彫られている。	10体ほどの集合なのでかなり大きめにスペースが取られている。屋根があり、赤い緞帳？が吊るされている。	屋根と壁があって、傘や掃除用具などが立てかけられている。とても綺麗なので手入れが頻繁に行われていそう。
管理者	曼殊院天満宮	圓光寺	詩仙堂	狸谷山不動院	京都信用金庫修学院支店	一乗寺馬場町	不明	住宅の方	清賢院	住宅の方	上一乗寺の町内会	下り松地蔵会	狸谷山不動院
日常の祀られ方	地蔵が置かれている石の上に、お賽銭が散らばっている。	庭のメインの地蔵になっているようで、SNS向け。祀られてはいない。	SNS向けだが、お賽銭が周りに散らばっているので信仰の対象でもあるようである。	普通の地蔵が側にあるので、一緒に祀られている可能性有。	前掛けと両脇にお花が供えられていて、お水を入れるところもある。花が新しいので、綺麗に祀られている。	両脇にお花などのお供え物がある。湯呑やお賽銭も供えられていて、綺麗に祀られている。	延命地蔵尊として祀られているようである。小さい花が両脇に供えられており、真ん中に賽銭箱が置いてある。	両脇に花瓶があり、それぞれに花が供えられている。湯呑が二つ、線香を供える場所が一つある。散らばっていないため定期的に手入れされていそう。	両脇にある花瓶にそれぞれ花が供えられているが、若干枯れ気味。湯呑と線香を供える場所がある。付近に木があるが葉が落ちていないため掃除はされていそう。	石の花瓶二つにそれぞれ花が供えられている。水の入った湯呑が三つ、線香を供える場所とお賽銭を入れる箱が置かれている。	化粧されているほうは両脇に花瓶が置いてあり、それぞれに花が供えられている。もう片方は真ん中に二つお花が供えられていた。在以外の供え物は特になし。	両脇に葉っぱがお供えされていて、それぞれの地蔵に湯呑が置いてあり、水が供えられている。小さなお賽銭箱がある。	千羽鶴や、願い事が書かれた前掛けなど、かなりたくさんのお供え物がある。周りにはお花も供えられていて、身を清めるための柄杓も置かれていた。
特別に祀る日の有無	無	無	無	無	無	精霊送り	無	無	無	無	不明	無	無

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
マンションの敷地内に続く細い道	住宅の脇に隠れるように位置。	道端	赤山禅院敷地内	赤山禅院敷地内	赤山禅院敷地内	赤山禅院敷地内	赤山禅院敷地内	住宅街の端	道端	住宅と畑の間	車道脇	公園のそば	公園の中	マンションの駐車場	道路沿い	住宅前
顔がない。立体的ではない。	地蔵というより石	顔がどこかも分からない。ほぼ石。立体的ではない。	輪郭は認識できるが、顔のつくりは苔に覆われていて判別不可能。立体的ではない。	顔はかろうじて認識できるが立体的ではない。	片方は顔部分は認識できるがつくりは立体的ではない。もう片方は顔がない。	片方は顔部分は認識できるがつくりは立体的ではない。もう片方は顔がない。	顔、輪郭ともにはっきりしていて割と立体的。菩薩に寄せられている。	顔は判別できない。立体的ではない。	顔は判別できない。立体的ではない。	顔の部分が欠けていたり、すり減ったりしている。立体的ではない。一つは首と胴体が分かれている。	輪郭はくっきりしているが顔がほとんどない。立体的ではない。	顔は書かれたもので、元の形は判別できないが、立体的ではない。	顔のつくりは立体的ではない。輪郭は認識できる。	顔のつくりは立体的ではない。軽く化粧がされている。	顔のパーツはすり減っていて認識できない。立体的ではない。	輪郭ははっきりしているが、つくりは立体的ではない。地蔵そのものに台座がついている。
2体の集合で、直置きされている。屋根はあるが簡素で蜘蛛の巣がある。	しっかりした台座と屋根がある。低い位置に設置されている。	しっかりした台座と屋根があるが、低い位置に設置されている。白い前掛けをしている。	地べたに直置きされていて、松の柄の前掛けをしている。	地べたにに直置きされていて、般若心経の書かれた前掛けをしている。	2体の集合で、地べたに直置き。それぞれ違う柄の前掛けをしている。	2体の集合で、地べたに直置き。片方は柄の入った赤い前掛けをしているが、もう片方は無地。	3体の集合で、各自に台座がある。屋根はなく野ざらし。同じ柄の入った赤い前掛けをしている。	6体の集合で、白い前掛けをしている。全部地べたに直置きされていて、屋根はあるが簡素である。	4体の集合で、白い前掛けをしている。地べたに直置きされていて、屋根はない。	4体の集合で、全部地べたに直置きされている。白い前掛けをしている。	車道脇のスペースに直置きされている。屋根はなく。白い前掛けをしている。	しっかりした台座と屋根があり、紫の暖簾？が吊るされている。赤い前掛けをしている。	しっかりした台座と屋根があり、台座に花が彫られている。小さい白い前掛けをしている。	レンガの台座に大きめの屋根が付けられている。赤い緞帳？が吊るされている。	他よりは立派なお家に住んでいる。赤い前掛けをしている。卍の彫られた台座に乗せられている。	広めのお家に大きめの台座。紫の緞帳？が吊るされている。台座には卍がついている。
不明	不明	不明	赤山禅院	赤山禅院	赤山禅院	赤山禅院	赤山禅院	不明	不明	不明。	不明	不明	不明	マンションの方	不明	不明
花瓶の中に枯れた草がある。線香を供える容器がある。	両脇の花瓶に花が供えられていたが、枯れ気味だった。真ん中に湯呑が置いてある。	二つの花瓶に花が供えられていたが、日当たりが良すぎてしおれ気味だった。	小さい籠が一つ置かれていて、その中にお賽銭が入っていた。他は何もない。	小さい籠が一つ置かれている以外は何もない。	小さな籠が二つ置かれている。小さな蝋燭立ても置かれている。花を供える場所はない。	お供え物スペースが一つもない。ただそこにあるだけで祀られているとは言い難い。	花瓶、湯呑、線香それぞれ供える場所があるが、どれも供えられていない。線香は燒え尽きた後の短いのが残っていた。	両脇に花が供えられており、人数分の湯呑と線香を供える容器が置いてある。	4体それぞれの前に花瓶と湯呑があり、水とお花が供えられている。	それぞれの地蔵の前に紙コップで水が供えられている。二つの筒に葉っぱが供えられている。	両脇の花瓶に花が供えられており、湯呑が三つ置かれている。線香も二つほどあげられていた。	両脇に花が供えられていた。真ん中に湯呑とお菓子が置かれている。	中の花瓶に花が供えられていて、水の入った湯呑の横に缶ジュースが置いてある。	両脇にピンク色の菊？が供えられている。水入りの湯呑が置いてあり、線香に４本ほど火がついていた。	線香とお花を供える場所が用意されており、それぞれお供えがされていた。湯呑も置いてあった。	線香とお花を供える場所があり、お花は両脇のうち片方に供えられていた。燭台と湯呑もある。
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無

ファンシー地蔵の謎

⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
住宅街道路沿い	曼殊院天満宮	住宅の敷地内	住宅敷地内	畑と畑の間	山の方に向かう道の途中	住宅街の細い裏道	道路脇のスペース	曼殊院から下の通りに出るところ	住宅の壁	詩仙堂に行くまでの坂道の角	住宅敷地内	テクネジャパン入り口付近
輪郭ははっきりしているが、つくりは立体的ではない。地蔵そのものに台座がついている。	顔の輪郭は残されているが、顔のパーツはすり減ってしまっていて判別できない。3体あって、一つは首がなく、もう一つは首のところで分断されている。後の一つは欠損無し。立体的ではない。	化粧をされているので、元の顔のつくりはわからないが、立体的ではない。大きめ。	他の地蔵と比べると顔のつくりが非常に分かりやすい。半分立体的。	どれも顔を判別することができない。立体的ではない。	輪郭も顔も認識できない。立体的ではない。	輪郭も顔も認識できない。立体的ではない。	全体がカラフルに化粧されており、元の顔はわからないが顔のパーツは恐らく判別できない。立体的ではない。	輪郭がかろうじて認識できる。顔のパーツはすり減っていて無い。立体的ではない。	元の顔はほぼ認識できない。立体的でなく、ほとんどが書き足されている。	顔まで前掛けをかけられているもの、そもそも顔と呼べる部分が存在しないものがある。立体的ではない。	顔は判別できない。全体的にすり減っていて立体的でない。	他の石から地蔵の部分だけを切り取ったような見た目。顔のパーツの判別はできるが、首から下は一体化している。
高めの台に置かれたお家の中にある。白い前掛けをかけている。卍の書かれた白い暖簾？が吊るされている。	野ざらしだが木陰に置かれていて、水を供える場所がある。	ちゃんとした地蔵の家に祀られているので、野ざらしではない。前掛けで首から下は隠されている。	他の石像と一緒に庭のようなところに置かれている。野ざらし。	14体の集合で、台座や屋根などはなく、土に突き刺してある状態。全部が赤色の前掛けをしている。	台座がないので低い位置にある。屋根もしっかりしている。	４体の集合で、４体ともフクロウ柄の前掛けを付けている。お供えスペースはあるが野ざらし。	４体の集合で、白い前掛けをかけている。屋根はないが台座がしっかりしていて、うっすら卍が彫られている。掃除用具が置いてある。	白い前掛けをしている。屋根はないが台座がしっかりしていて卍がついている。	住宅の壁を掘ってスペースにしていて、屋根と台座がしっかりしている。白い前掛けを付けている。	野ざらしだが大きめの植物が屋根の役割をしている。10体ほどの集合	敷地内の一角に地蔵スペースがある。台座がしっかりしているが野ざらし。	花壇のスペースに２体固定されている。屋根はなく野ざらし。
不明	曼殊院天満宮	住宅の方	住宅の方	不明	不明	不明	不明	不明	住宅の方	不明	住宅の方	テクネジャパン
花柄の花瓶が両脇にあり、そこに花が供えられている。線香を供える場所と、おりんがある。鳴らす棒はない。	水受けに水が供えられていて、少量のお賽銭が散らばっている。本格的な手入れはされていなさそう。	お茶とお線香らしきもの、ペットボトルに綺麗なお花が供えられている。	周りにお供え物は何もなく、特に祀られはいない。	それぞれの前に湯呑が置いてある。等間隔に置かれた４つの竹筒には花が供えられている。	両脇の花瓶に花が供えられていて、地蔵の前に置かれたお盆に湯呑と団栗が供えられている。お賽銭を入れるためのカップがある。	二つの花瓶にそれぞれ葉っぱが供えられていて、真ん中に人数分の水入りの湯呑がある。ろうそくたてはあるがついていない。	両脇の花瓶に花が供えられていて、４人分のお茶碗に水が供えられている。枯葉が落ちているため、掃除の頻度は高くなさそう。	台座に水を供える凹みがある。小さな花が供えられていた。	両脇の花瓶に花が供えられていて、湯呑と線香を供える場所、お賽銭を置く場所が用意されている。綺麗なのでていきてきにそうじされていそう。	コンクリートブロックの上に湯呑が置かれている。石でできた花瓶と線香を供える場所がある。定期的に手入れされている様子。	両脇に花瓶があり、それぞれに葉っぱが供えられている。湯呑と小さな燭台がある。葉っぱが新しいので手入れはされていそう。	周りにスペースはあるが、特に供え物があるわけでも、供え物があった痕跡もない。
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無

道端の地蔵⑨

町内会管理と思われる地蔵❼

ファンシー地蔵2

道端の地蔵㉓

町内会管理と思われる地蔵❽

ファンシー地蔵3

各写真の番号は表１の番号と連動している。

引用及び参考文献

『総合佛教大辞典』法藏館　2005 年
中村 治「京都北郊の盆の行事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 207 集　2018 年
極楽寺ホームページ https://gokurakuji.org/memorialdetail/　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
極楽寺 YouTube
https://www.youtube.com/watch?v=7rW7jQ0S6GA　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
https://www.youtube.com/watch?v=s3ULCGyJyU0　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
https://www.youtube.com/watch?v=r8EzCwSXzns　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
https://www.youtube.com/watch?v=b8m3ZbjZYog&t=109s　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
京都尊陽院ホームページ https://sonyouin.biz/mizukokuyou/　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
長福寺ホームページ http://www.choufukuji.jp/mizuko.html　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
宝善院ホームページ https://www.hozen.or.jp/mizukokuyou/index.html　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
詩仙堂丈山寺ホームページ https://kyoto-shisendo.net/menu_details/%E5%9B%9B%E5%AD%A3%E6%8A%98%E3%80%85%E3%81%AE%E9%A2%A8%E6%99%AF/　2024 年 1 月 11 日最終アクセス
圓光寺ホームページ https://www.enkouji.jp/season/winter.html　2024 年 1 月 11 日最終アクセス